ワカヤマヤチネズミはそこにいる！—85年秋以来、ご指導頂いて

浅川 満彦［所属：酪農学園大学獣医学群　関係：野ネズミ研究から野鳥救護まで］

野ネズミ類と線虫類の宿主ー寄生体の生物地理をテーマに研究を開始して約3年後、母校（酪農学園大学）を離れ、北海道大学大学院獣医学研究科に在学中の1985年初秋、ワカヤマヤチネズミの寄生虫を調べたくなった。そこで、北海道大学・阿部 永名誉教授（当時、助教授）に相談した所、土屋先生をご紹介頂いた。早速、質問書簡を宮崎医科大学（当時）の土屋先生にお送りしたところ、間髪を入れずにお返事を頂き、35 mmスライドも同封されていた。「那智の滝の（スライドの）場所にシャーマンを仕掛ければ間違いはない」という内容であった。先生が具体的に指し示すことに関し、天才的と直感した（ですよね、皆さん）。翌年3月、新婚旅行［註： カミさんはそう思っていないが、要するに、婚姻届提出直後の長距離移動を伴った旅］を兼ね、那智大社社務所を訪問し、トラップ設置を頼んだ。が、（当然？）拒絶。完璧なアドヴァイス（スライドで示された場所での捕獲可否）は検証できなかったものの、先生の手紙には、本州のヤチはガレ場の冷やっとした場所に生息するとも記されていたので、最終的に、本宮で、無事、ワカヤマヤチを採集出来た。

これを皮切りに、春休みの3月中旬は、夫婦2人（後年は3人の子を従え）で野ネズミ採集の行脚をした。雪に閉じ込められた北海道を脱出、春の空気を一刻も早く吸いたかったのもある。したがって、「九州でスミスを採る！」の決定は早かった。1988年3月、宮崎県・矢立峠でスミスを捕獲［註：香川大学・金子之史 名誉教授によるとこの種の南限］、心に余裕が出来、「例のワカヤマヤチでお世話になった土屋先生に会ってみないか」となり、夫婦で医科大に行った（カミさんも、マメ人間・ツチヤ先生と捉えていたらしい）。折悪しく、先生ご不在。

「まあ、すぐどこかでお会いするだろう」と楽観していたが、成就したのは、随分経った哺乳類学会か何かの集まりだった。その時、ネズミ仲間数名と集合写真を撮ったはずだが……。［註：本拙稿をお読みの、特に、若い方へ。アポ無し訪問はダメですよ。これは大変悪い例です］。もちろん、会ってはいなかった間も、先生とは手紙と電話でやり取りし、ユーラシア大陸の野ネズミ材料も頂いた（多くの共著論文として刊行されたが詳細略）。そのような未見期間のエピソードを一つ。1992年夏、宮崎の土屋先生から図鑑を作るということで、ハントウアカネズミを生きたまま送って欲しいと依頼された。少しは借りが返せると思い、指示に従い、吉田牧場（早来）にむかった。その時、3歳になったばかりの長男を連れて行ったので、吉田牧場のご夫妻に、随分、歓迎されたし、無論、ご夫妻は（道衛研時代の）土屋先生のことを良く憶えておられた（ちなみに、その牧場の御子息、僕の勤務先に進学されていた）。無事、*Apodemus*が採集されたので電話報告。「特徴的な鳴き声がすればハントウアカに間違い無し！」ということで、電話をネズミの前に差し出すが、無口。埒が明かないので、日通送り（その際、リンゴを入れておくようにという指示も順守）。このネズミとは『日本の哺乳類』（東海大学出版会）の「ハントウアカ」のところの写真とし

て再会した（先生から頂いたその本に添えられた手紙より）。

その２年後（1994年）に、無事、学位取得が出来、ホっとしていたが、直後、勤務先の「野生動物医学」担当を命ぜられ、「何から手を付けたらいいものか」と、頭を痛めた際も、先生に助けられた（多くの教材用の材料供与など）。さらに４年後（1998年）、勤務先の職員組合書記長に就任、宮崎で関連の会議があり、念願の医科大学（その頃は、宮崎大学医学部に再編）飼育施設にお邪魔できた（今度はアポ有り）。夥しいネズミ類もだが、何故かチゴハヤブサも飼育され、それが先生に懐いていた。施設見学後、天ぷら屋さんでお昼ご飯を御馳走してくれたが、その駐車場で「あっ、ジョウビタキ！」と注意を促してくれた。（ヤセイ担当で仕方なく始めた）鳥観も３年、だんだん楽しくなってきた僕の目には、先生の生き方は理想的として映った瞬間だった。その後は、今世紀になって直ぐ、野生動物医として東京農業大学大学院の講義に招聘して下さり（その模様は「Animate13号（2016年）」に掲載）、ゼミ生卒研では羽田やそのほかの空港でバードストライク防止のため有害捕獲された野鳥が大量に届いた。

約30年間の土屋先生との友誼・交流友誼上に構築されたエピソードが次々と奔出し、規定文字数を超過しそうなので急ぐ。一昨年の冬、青山学院大学で勤務先の入試があり、その業務の合間、近くのカレー屋でお昼を一緒にした。その後、宿まで送って下さった。「東京生まれだが、このあたりを歩いたのは初めてだよ」と言いつつ見せた笑顔が最期となった。フリーライダーを軽蔑する僕ではあるが、老化が着実かつ激しく進行しつつある今、とても不安になることがある。「土屋先生が僕にして下さったように、後進に対して同じように出来るのか」と。

思い出の写真

最終講義